

ビハ—ラリポ—ト

No.19

May

1996

CONTENTS

セミナー	佐々木久長	今、家族を考える	2
仏教講座	亀谷 健樹	曹洞宗の教えと現代	22
Book Review		二度目の大往生	24
INFORMATION			25

ビハ—ラ Vihara

休養の場所、気晴らしをすること、僧院または寺院

『漢訳対照梵和大事典』

- 一、病人に供給す 二、病のために医薬の具を求む
- 三、病者のために看病人を求む 四、病者のために法を説く
- 五、余の比丘のために法を説く 六、法を聞いて教化す
- 七、大徳のものに供養し、恭敬するために 八、聖衆に供給するために
- 九、深経を讀誦するがために 十、他に教えて深経を讀ましむ

『十住毘婆沙論』卷第十六

今、家族を考える

1996年3月23日

鷹巣町 鷹巣阿仁広域交流センター

佐々木久長

聖霊短期大学講師

はじめに

只今御紹介頂きました佐々木久長と申します。私は見て頂くとおわかりのように1960年に生まれました。生まれも育ちも秋田市で、秋田大学の教育学部で幼児教育と特殊教育について学んでいました。大学を卒業したら障害を持った子供達の教育に携わりたいと理想を持っていました。途中で人生を変える出会いがありました。鷹巣の坊沢という所に実家のある先生で、それは問いかけでした。「お前は、障害を持った子供達のために勉強をしているようだが、障害を持った子供も同じ人間なのか。」といわれました。「当然同じ人間です。」といました。「何故お前は障害児教育をしているんだ。同じ人間だったら普通の子供達と同じ理論、心理学

だったら心理学、発達だったら発達の理論で説明できなくてはいけないじゃないか。」と言われて、はたと考え込んでしまいました。それが21歳の時でした。己を知りなさい、ということで、自分の悩みを解決するための心理学を勉強しなさいという先生について、大体15年位、そろそろ先生と出会ったときの、先生の歳になりかけて、あらためて自分を見直しているんですけれど。

現在は短大で、社会福祉、教育心理学、人間関係論という科目を担当しています。4月からは、新しく出来た、専攻科で、もう2年勉強するコースで障害発達論、家族福祉論という2つの科目を担当する予定です。これは今まで勉強してきたその人間の生涯、生まれてから死ぬまでにおいて家族の果たす役割を考えるために自分で勉強したくて作ったんですけれどもそれを担当する予定です。

私が家族にこだわるようになったのは、多分、父親との関係があったと思います。正直言って私は、父親と大変仲が悪い時期が長く続いておりました。今でもすんなり行っているかという、なかなかそうはいかない面があります。どれ位仲が悪かったかという、ある時ちょうど私が20歳位だったと思うんですけど、父親が、余りにも私が反抗するので「じゃ、おれはどうしたらいいんだ」ということを聞いてくれたんですね。そのときにわたしは未だに正直言うと後悔しているというか、ずいぶん酷いことを言ったもんだな、と思ってるんです。「俺にかかわらないでくれ、なにも言うな。なにも関わるな。これがあなたにしてもらいたい一番のことだ。」ということを行ったんですね。関係が悪くなる、父親のことを嫌いになるのに10年位、物心着いてからという、思春期を迎えてから何年も経っていましたが、長年掛かって嫌いになったんだからそう簡単に仲直りなんか出来るものかということで父親と決裂したことがありました。でもどんなに父親のことを嫌いになっても、関係を断とうとしても、離ればなれになればなるほど、自分の中に大嫌いな父親が観えてくるんですね。

あるとき方針を変えて、これはどうも逃げられないようだということで、家族ということを考え出

したのがこの道へ入ったきっかけだったと思います。ですから今でも私が、皆様の親子関係はうまくいってると思うんですが、幸せというか、普通の仲の良い親子関係であれば、家族関係ということについて研究しなかったのではと思います。

先ほど1960年、今35歳ですけども、結婚して2年ちょっとです。去年の9月に初めて息子が出来ました。私、6人兄弟の長男な者ですから、天王町追分というところに住んでいて、実家もあるんですけども、最初、同居するつもりで2世帯住宅を考えたんですね。今住んでいる家を全部壊して、更地にしてそこに新しく2世帯住宅を造ろうという話をしてたら、親父が「俺が苦労して建てた家まだ住めるのに、なんで壊さなきゃいけないんだ」ということになって、またそこでもケンケンガクガクのことになって、それじゃ一緒に住むという話は白紙に戻そうということで、家の奥さんの実家が横手なもんですから、大曲にアパートでも借りて、という話をしてたら、父親の方もちょっと心配になったんでしょう、近くに中古の家があるから「お前そこを買え。」と言われて、隣の町内に住んでいます。

この間、久しぶりに子供をつれていったんですけども、実は去

年の12月の末から、お正月に掛けて、学生をつれて2週間ほどフィリピンに行ってしまうと、その間、家の奥さんが実家ですいぶん耐えたものですから、ちょっと怖くて、私の実家と距離をおいてたんですけれども、これからどうやって付き合っていくといいか。

長男として下に妹が3人いて、さらに、弟が2人いるんですけれども、弟は2人とも東京に行っていて、好き勝手なことをやっている。私は多分、そういう意味で親の面倒を看ていかなければいけないんじゃないかな、というような生活を送っています。

何故今こう私のことを話させて頂いたかということ、色々な家族に関する研究をしている先生のお話しは、どうもその先生がどういう家族生活を送っているかということが、家族のあり方に対する意見に大分影響があると思うんですね。ですから、今日私が話を家族ということについてというのは、この私の今、話をしたそういう人生を送っている、私の家族観ということですので、ぜひ皆様にも家族というものを後半お話ししていただければな、と。

正直言って、家族ということについて、話をすることは、辛いことなんですね。常に自分ということを問われて、35年生きて来た

ものですから、お前は一体何をやっているんだと。

夫婦喧嘩で一番弱いのは(この話を頂いたときに、電話が居間にあるもんですから、妻が来てて、あんた偉そうなことを言ってるけど、なんて言われて本当に後ろ髪をひかれる思いというか、)実はフィリピンから帰ってきて3月の3日?、2日ですね。土曜日、朝突然、「私今日子供を連れて実家に帰ります。」といわれて、ショックでしたね。「どうして私が実家に帰っちゃいけないんですか。」「じゃ、早目に言ってくればよかったのに。」「今朝決めたんです。」なんて言われて。横手でコミュニティーカレッジの予定があったものですから、一足先に帰るということもあったんでしょうけれどもちょっとヤバイなど。そういう夫婦生活を送っています。そういう前置きをおいといて、今日は皆さんと一緒に、やっぱり家族ということしかないんじゃないか、と思います。

家 族 と は 何 か

レジメに一般的な話ということで、家族の定義を引用しておきましたが、一昨年、1994年確か国際家族年ということで、家政学会も国際的に、家族について取り組んだんですが、そのときの大前提が、家族とは定義できないもの

である。何故定義しないかという
と、定義してしまうとそれ以外の
生活をしている人達が家族じゃな
いということになっちゃうんです
ね。それを避けるために、なんでも
ありと。確かに結婚をしない、
例えば家族というのは結婚をして
始まりと普通言われるんですが、
結婚しないで同棲するとか、それ
から一緒に住むということから言
えば、別居したり、単身赴任だど
か、色々もっと極端に言えば、日
本ではあまり聞きませんが、同性
愛のカップルも家族というふう
に見做される。これは法律的な話と
は別にして、身上的にペットも家
族だという。一緒にあげた定義と
いうのは、ほとんど機能してない
というか、それじゃやっていけな
いんじゃないかということで、家
族は定義できないんだというのが
今の一般的な流れだと思います。

確かに家族は変わってきています
ね。家族を捉えるときに家族社会学
では、形態と機能という視点を使
います。形、大きさですね。昔、直系
3世代、とにかく、沢山何人も居た
のがどんどん核家族化して、結局独
り暮らし。家族構成も、例えば5人
家族の時に、夫婦と子供3人かお爺
ちゃん、お婆ちゃんがいて、子供一
人と違って来るんですけども、そう
いった意味でも、世代の幅が狭く
なって、結局行き着くところは、一人
暮らしじゃないかと思うんですね。

今日私が皆様にお聞きしたいの
は、一つは一人暮らし。家族は一
人でも家族だろうか、いかがで
しょうか。これが多分、これから
家族を考えていくときの分岐点に
なるのではないかと思います。
ある先生ははっきりこうおっしゃ
います。一人でも家族だと。ただ
正直言って、私はどうも一人で家
族というのではないんじゃないか
と思っているんですね。ですから今
日皆様にぜひこの一人でも家族な
のかということをお聞きしたいな
と思って参りました。もう一つ、
機能面でも簡単にいうと、家族な
んかいらないのではないか。家族
がなくても生きていける。かつて
は生きていくために必要な制度と
して、家族があったんですけど
も、本当に必要なんでしょうか。
どんどん余計なものをとっばら
ったときに、その人が私にとって
家族とは何かということを感じて
いるアイデンティティという言葉
がありますね。それを同じように
私の家族というのはこの範囲だ
ということを意味をもっている関
係としての家族という。これが究
極の家族の定義じゃないか。その
人が私にとって、これが家族だ
と思うものが、家族だと言っ
てるんですね。そこまでいきつ
いてしまうんじゃないかと言わ
れています。

こうやって考えてくると、話し
がここで終わってしまう。皆さん

に勝手自由に家族というものを定義して家族でうまくやってください。一人でも家族だと思える人はどうぞ一人で自由気ままに生きて行くことになってしまおうんですけども。私としては、一人で暮らしている人が増えていることもわかりますし、そういう背景もあると思うんですね。だからそれでいいんだというような現状を肯定するような考えでこのまま行ったら、多分、崩壊に向かう家族が多いんじゃないか。ぜひ今こそ、家族とはこうあるべきだという、そうじゃない家族もあるんですけども。人間にとって必要な集団というか、家族というのはこうなきゃいけないという、きちんと社会が持たなければいけない時代に来ているような気がします。そういうことが求められている。

先日、びっくりしたのは、生涯学習センターで、放送大学の公開講座があって、そこに放送大学の教授で社会福祉を専門にしている方が、阪神淡路大震災の報告ということでいらっしゃったんですけども、その最初の話の中で、政府は将来の高齢社会を進めていくシステムとしての家族というものを放棄したというか、あてにしなくなった。それが介護保険だということですね。

我々研究者もこんなに早く政府が家族というものを見捨てると思わ

なかったというんですね。私は正直言って動揺しました。長男として、家族というか自分の親とどう係わっていったらいいかと真剣に悩んで、例えば、仕事の面でもこれから何処か県外へ行く方もあるわけですね。親がいるから秋田で勤めていようとそういう選択を考えていった時に、国ははっきりと家族を充てにしないということを言われてしまった。確かに在宅福祉ということを行っていますね。場所としては家なんですね。施設を作るつもりはない。しかし、人間関係としての家族が介護する機能は、将来ないだろうと、そうした制度が、介護保険制度だと中央の研究者達は考えているようです。こういったことが広まってくると、たぶん、今まで以上に、今一番問題になっている扶養の問題でですね、親を見捨てるというのは変ですけども、子供は親の面倒を見る必要はないんだということになれば、一人でも家族というか、夫婦で暮らしている場合は、どちらかが亡くなるまで二人で暮らして、そして一人になるという今増えている時代の流れ、現象は確かにそうなんですけども。それに、一層拍車が掛かるんじゃないかなと思っています。

私は、家族関係について係わってきて今年で平成7年度でちょうど10年だったんですけども、

平成8年度からのテーマはそれに対する反論というか、反旗を翻していこうかなと考えているんです。なかなか厳しい。その中ではあっさり、もう家族はだめだから自分で自分の生活はやっていくようにしないと子供ができたからと安心してはいられないね。あてにならないから。自分のことは自分でね、と。

私の唯一の救いは奥さんが幸か不幸か若いもんですから11年歳が違ってて私は見捨てられない限り、奥さんに色々面倒を看てもらって死ぬんじゃないかなと思うんですけども。ですから、毎年厚生省が平均寿命を発表しますね。あれをみるとうちの奥さんは早速それを計算して私は何歳で自由になれるとその都合でもうちょっと長生きして、と言われる歳とか、無理しないでいいわよ、と言われる歳とか、あるんですけどもその中に子供というのは出て来ない。私はまた、半年ちょっとですけども、時々子供に囁きかけているんですけども、果たしてどうなるか。

レジメの1ページの下からですね、2ページめの上にかけて家族関係論的立場における集団としての家族の特徴の確認。家族という関係の特徴の確認というのがあります。これは私が家族関係論を最初に指導して頂いた先生の本から

引用してきたんですけども、家族というのは、小集団に限られている。メンバーが限定されている。一般的には、家族や地域でもそうなんですけども、一つの集団というのは区切りがありますね。内と外、家族の特徴というのは、中から外には自由に出られるけども、外から中に入るのは難しい。今までは結婚するか血縁があるかじゃないと入ってはいけない。これを社会的には反封鎖システムというんですけども、たぶん、今、家族ということに係わろうとしているときに、問題になっている点じゃないかと思うんですけども、家族というものを定義してきた一つの枠組としているメンバーは二者択一的な家族関係にせまられている。皆さんにも考えてもらいたいんですけども、皆さんにとって家族は誰かということですね。

「家族は一つしかない。」こういう話を学生にするとちょっと難しいんですけども、結婚、特に女性の場合どうですか。自分が生まれ育って、旧姓の家族がありますよね。心の中で、その家族は私の家族と承認できますよね。

私は結婚するときに親に何を聞かれたかということ「俺達をどうする気なんだ。」と言われたんですけども。家の奥さんは当時まだ若かったものですから、何も知らずに同居するというか。友達にも言われ

ました。「知らないうちに結婚してしまえ。」相手が誰かとか、どんな人か、ということじゃなくて「俺達をどうするの。」「同居してもいい」と言ってるということで、それじゃいいよということだった。

そのへんがまだ、結婚2年ちょっとですと難しい気がする。しかし家族というのは、最終的に自分の家族とは何か。長い接触がある子供、途中で出ていったとしても18年か20年くらい、夫婦の場合50年近く一緒に暮らす。役割がある。一緒に食事をしたり、住んだり、竈を一つにすると、これが一般的な家族の特徴という関係には3つの視点があるとおもうんですね。

家族という関係の特徴

1つは夫婦関係です。夫婦という関係は、新しい家族は結婚によって始まると考えています。たまに学生で、親子関係がうまく行っていない学生がいるんですけども、今の家族はもう捨てて、自分で新しい家族を早く造ったらどうなんだ。

形成における選択の自由、誰とでも結婚できるわけですね。まだしていない方、ぜひこれからいい人を選んでください。やめることも出来るんですね。やめる人沢山

います。子供の親として社会的責任があればあるんじゃないかな、とかってはいわれています。それから親子関係というのは2つの関係がある。一つは血縁ですね。この血縁というのは、選択の自由のない永久に変わらない、運命共同体的関係、この運命共同体的関係という部分が最近歪んできているような気がするんですけども、絶対に変えられないというか、間違いのない事実としてここにいる我々すべてに、共通していることは、すべての人が、一人の男性と一人の女性が愛しあった結果この世に存在しているということですね。男性と女性が一人づついるということは、絶対に変えられない宿命です。そういう意味で親子関係というのはその運命的な関係があると同時に、養子として子供をあげたりもらったりという関係もあったと。この二面性、これが親子関係の特徴です。3番目、これが今これから考えていかなければいけないことだと思うんです。その扶養関係ということから言えば全面的無条件の関係というのが家族の関係の特徴であり、家族の一員として見做されるかどうかは生命の維持に繋がる。大袈裟かも知れませんが、そうでない、実際のそういうケースはあると思います。ですから、何度も言うようになるにかという枠の中に入っている

かないかということで生きるか死ぬか、これ他の人だと関係ないわけですね。学生にもよく言います。高い授業料、誰に出してもらっているのって、「親です。」平気で言うんです。「良かったねって。」これ他人だったら出せない。他人の子なんか。自分の子だから。そういう意味。私にとっての家族は、今までの話を整理すると、家族というものは変わってきている。もっと遡れば、今みたいな家族になったというのも、その前の状況があるんですけども、それはおいといて、家族が変わってきたというのは、家族は変化しうる何物でもない。社会の変化に影響を受けているということで、ここのところ大事な点だと思うんですけども、家族というのは、実は、社会的な枠組だったとおもうんですね。社会的な枠組がなくなった。つまり枠組というのは、定義ですね。家族というのは、こういうもんだよ。社会が一人一人に押しつけていたものが、教育だとか、地域だとか、いろんな言葉が入るんですけども、そういったものをつぶらうことによって、一人一人の人間に今戻されている。そこから出発しなければいけない、そういう現状にあるんじゃないかと思えますね。団欒の例ということで、家族の出発点としての配偶者の選択と結婚としての、

かつては結婚適齢期といのがあるって結婚しないているとなんか白い目で見られる。私の結婚に一番プレッシャーを与えたのは皇太子でしたね。帰ったときに、おい、皇太子も結婚するぞ。父親がそういったのがヤバイナと思ったんですけども。プレッシャーがなくなるので、例えば、若者は結婚することによって、キリスト教的に言うとなんか性的な関係をもって子供が出来ちゃうとまず夫婦という枠組みを決めてそこで子供をつくりなさい、性的な関係を楽しみなさいということと変ですけど、楽しみなさいということそこには、愛というレッテルを張ったわけですので、それをつぶらってしまて、比較的愛に性的な関係を持ち合うと。

この間、東京の弟のところに行ったら、なんか友達が夜中に訪ねてきて、どうのなんか比較的こう誰かわからずにそういう女性と複数の女性と関係をもってきて、突然エイズの話をしたもんだから「俺もしかしてエイズと思う。」そういう人達というのは、結婚は非常に難しいですね。青年心理学の教科書にこういう文章があります。一女性を受け入れるときに必ず涙を流す。それがうれしい涙か、悲しい涙かでその後の人生の幸か不孝かが決まる。一男性と女性の結びつきというのは、非常に

心の奥深いところで本来あるものだと思いますね。感じることを失ってしまっている。女性が男性からすると性的な欲求を満足させられて、得たように思うかもしれないけれど、それは女性から与えられている罰だという表現もあります。男性が多く女性と性的な関係を持つことによって、自分が本当に家族を作るべきというか、結婚しなきゃいけないこだわりの部分が失われる。そういう意味で、配偶者の選択と結婚というのは非常に今危機的な状況にある。もう一つは、無限の選択の可能性という現象から、同一性拡散。独身の方ももしかすると私には可能性があると思っっているかもしれませんが、実際に結婚する相手というのは、結構身近なところで出会ってる。でも、身近にいる人は嫌で、もっと他にいるかもしれないということで結婚だけじゃなくてそれ以前に学校だってそうですよね。何年も浪人すればいい大学に入れるかもしれない。こだわればいい会社に入れるかもしれない。青年期の同一性の拡散という。

ソフィーの手紙でしたっけ。
『私は誰』、という本、流行りました。それだけ悩んでいる人がいるということなんですけども。30～35歳位までには、自分はどうやって生きていくかということ

をそろそろ決めなきゃいけないんですけども、決められない。一人の女性と人生を分かち合っっていうようなっていう決断は難しいんですね。夫婦という関係における混乱ということで私は男女強制云々というのは、これから目の敵にしていこうと思います。男らしさ、女らしさというのは、私、絶対あると思います。それと家族の中では役割分担が絶対必要だと思います。夫婦の平等なんていうのは、私の2年ちょっとの拙い経験からいうと不可能です。どっちかがリーダーシップをとって、どっちかがフォロアーでないと絶対にうまくいかないとおもうんですね。ですから、男女平等ということ言葉をだけやって、同じことをやらなきゃいけないということにこだわってしまうと、ギスギスしてしまう。本当にお互いを理解する技術、人間関係ですね、これが日本にはないとおもうんですね。私の拙い夫婦関係ですけども、2月に1回位やりますかね。家の奥さん突然無口になっていくわけですね。ドーンと来てお互いに激論というか、言いたいこと、溜まったことをぶつけるんですけども、普段から言っけばいいのに「決めてないよ」とか、お互いに理解しあうテクニック。テクニックではないんですけども、そういう技術あると思うんですね。それが今ま

で日本にはなかった。それが社会的枠組で返ってくる。風呂、飯、寝る、黙って新聞が出てくるとか、そういう生活が一変に取り払われてしまうと、何を言ってもいいのかわからない。それから、親子関係における混乱として、子供との関係がうまくとれない。片方で虐待。

この間も秋田市で、子供が亡くなってしまうけど、虐待、放任その一方で、過保護。特に母子の密着化、非常にバランスが崩れている。それから、子供を育てられない親。育てるといのは、躰、叱るんですね。これが何故大事かと言うと、良心、良いことと悪いことの判断ということによって出きると言われて言るんです。それが無いから、良いことと悪いことの区別がつかない。叱られないで育った子供も不孝ですけども私は子供を叱ることも出来ない親というのも大変じゃないかな、と思うんですね。3つめは、子供から見ても親、歳老いた親との関係。

秋田県で父親に対するアンケートのなかに、今自分は自分の父親、母親とどういう関係であるのかということが、子供との関係に影響するんじゃないかと思ってそういう項目をいれたんですけども、委員会でバツサリ削られてしまいました。なんて言われたかと

言うと「そこのところは触れないでくれ」と言われたんですね。みんなうすうす感じているんだけど、子供を小学生、中学生として持っている父親達は自分の親のことを気になっているんだけども、そこを突かれると先に進められなくなるから、それは抜きにして、下の方だけ見てくれと言われたんですけども。目を背けていると、そのつけが後でどっとくるとおもうんですね。

こうやって一つ一つ指摘しなくても皆さん一人一人が色々家族の問題点を見ているとおもうんですけども、その原因として私は戦後民主主義、特に個人主義と経済の発展。この2つをかなり厳しく追及しなければいけないと。そういう時代に来ていると思います。

戦後民主主義というのはたぶん悲惨な戦争の反省から、一人一人を大切にしようということで、命の大切さを出してきたと思うんですけども、例えば、一人の人間の命は地球より重い、この言葉を勝手に解釈すると、地球よりも私の命の方が大事ということになりますね。そんなことありえないでしょ。悪いけれどそう思いません。どうですか。一人の人間の命が地球よりも重いということは非常に深く解釈しなければいけないことなんですけども、自己中心的に解釈したら、地球と自分と対等

になってしまいますね。そこで私は自分の命よりも大切なものがあるということをおぼえてきた50年じゃないかなと思うんですね。それが例えば、人に迷惑を掛ければ何をしてもいいじゃないか。個人の自由と束縛する権利は何処にあるんだ。何故女性が子供を産まなければならないのか。歴史的なことは、『赤信号みんなで渡れば怖くない。』この言葉によって、私は多数決という民主主義による非常に不完全な意志決定の方法によって社会のルールが取り払われる、剥がされるそういう時代を迎え、家族ということ、一人一人が本当に考えなければいけないという、家族というものを混乱させてしまった原因じゃないかなと思っています。

最近強く思うのは伝統だとか、しきたりだとか、社会のルールだとか、そういったものを非常に生活の中で強く意識するようになってきました。同僚の先生、若い先生とも話をするんですけども、おかしきよな、30歳の我々が伝統だとかしきたりだとかということをお批判して、そうじゃないんじゃないかと自由を言っけいかなきゃならないのに、言っけもいいのに、そういうことを言わない50歳位の先生達が、ふがない。だから、学生に対しても授業中、私語をするなんていうことは非常識

だと思っけんですね。授業というのは勉強するところですよ。唯それだけの基本的なルールすら、20歳しかも大学にはいるような人達に押しつけられないというか、伝えられない先生の方が本当に異常だと思っけですよ。簡単ですよ。授業だから話をするなら別のところに行っけください。真剣に勉強しよう。唯これだけでいいはずなのに、そういう単純なことを言っけくれない。そう言っけてもね、話をする学生は少なくないし、結局多い。現象があるということをお認めてしまっけ。それを變えていかなければ、家族という問題も駄目じゃないかなと思っけですね。もう一つ戦後民主主義を支えてきた経済の発展、お金さえあればなんでも買える。価値が多様化してきたと言っけますけれども、私はそれは嘘だと思っけます。今の価値はお金しかない。お金さえあれば世帯の収入を向上させるために働く量が増えて、女性も結局働く。秋田県は女性が働く率が高いはずですよ。そしてその情報化によって破壊される常識というのは、今マスコミなんか情報が経済活動の対象になっていきますよ。情報が売れるというこはお金になる情報というのは我々の身近にない非常識なことしかないですよ。当たり前のこはお金を出してまで読まないでしょ。沢山

流されている情報というのは実はこの社会の中では非常識で、あってはならないこと。極端に言うのですね、しかしそれを絶えず繰り返し流されていることによって、そういう人もいるんだな。今一番確認されなければいけないことは常識だと思うんですね。常識というのは結構重いと思うんですよ。例えば、私の常識で言うと家に帰って裸になって、パンツ一つで、ランニングになってゴロゴロしてるのは常識なんです、家の奥さんからすると常識じゃないんですね。それ位受け入れてくれよ、と言っても、例えば、御飯の食べ方とかちょっとした常識だと思っていることが違うと夫婦の間でも気になりますよね。譲れない。常識は本当はその人達の深いところにあるはずなのに、それが多数決ということで非常識が常識化して、常識が非常識化している。そんな中で家族も、もしかすると、独り暮らしが増えている。これからは一人でも生きて行かなければいけないよ、というのが人間という観点から見たら、非常識ことにも係わらず、世の中の風潮が恰もみなそっちに行っているかのように流されているんじゃないか、という気が私はします。

私の考える家族の定義

2枚目のレジメに私が今家族をどう考えているかということを書いてみました。まず一つ、家族とは子供を産み育てるための場所だと思います。これは、人間も生物として、基本的な使命。すべての生物がもっている本能的な使命として自分の種を残していく。そのためにやっぱり一人の男性と一人の女性が愛しあって子供ができる。それが一番大きい目的だと思います。私は学生に結婚もそうなんだけど性的な関係を持つ時に、少なくとも、もし万が一この人の子供が出来て、この人の子供だったら産んでもいいな、と思える範囲でそういう関係を持つように指導しているんです。結婚というのは自分の子孫を作るためのパートナーの選択、決定だと思います。もう一つは人間として、人は一人では生きていけない。人間は社会的動物という言葉からわかるように、複数の人間が一緒に生きていく場所、子供を育てるという生物学的な目的と一人じゃ寂しいという個人的な目的が間にあって、社会というシステムが造りだした形が家族というものじゃないかと思うんですね。バランスが崩れている。かつての家父制度というのはそういう意味でバランスが取れて

いるわけですね。長男が確実に子供を残していく、そして家族という強い枠組があって、一緒に暮らしていく。それなりの根拠があったと思うんですが今バランスが崩れるということで、子供を産み育てるための場所、ということにこだわって、出産育児への過剰な反応。私の妻が書店に行くと必ず寄るのが、育児雑誌のコーナーなんです。家の例なんです、5人目6人目の時子供の時にはたぶん家の父親はアレ何時産まれるんだっけ、という感じで何人目かの時はとても酔っ払っていて立ち会うどころじゃなかったんですね。ところが、私の場合は陣痛室に二晩付き合わされて、私はこれから子供を産むの。大変なのよ、あなた傍にいて。これですね。男性が関わる。高校でも子供を抱いたり、ビデオを見たりするらしいんですが、女性の世界で見てもいいんじゃないか。産まれた後も、母親と子供は強いんですね。特に息子だと、かって愛した（今でも愛してると思うんですが）男性の遺伝子半分持っていますから、まんざらでもないですよ。自分の好きなように育てちゃってる。子供を母親が恋人同士のように電車に乗っていて、身体をぴったりとくっつけてるのを見ていて、ブルブルと気たんですけど。今、命の電話で、結構多いのが、母子の近

親相姦。今というよりかなり前からですけど。本質的に子供を産み育てるための場所と片寄ってしまうと母子密着にいくわけですね。それだけにウエートがおかれると子供が成長してしまうと夫婦でいる必要はありませんから、熟年離婚ということになるわけですね。これが目的1の片寄りだと思えます。目的2、自分の人生を楽しく生きたいということで、自分の子供はいらないよ、と言うカップルとか、結婚しなくたっていい。子供さえ造らなければ結婚する必要はない。好きな男性と女性が好きなだけ一緒にいて、嫌になったら別れてまた好きな人と一緒になる。この自由な関係で、全然問題ないと思えます。子供さえ造らなければ。この2つの間で、バランスを取らなければいけない。更に現代社会では親を人生の最期をどう看とるか、これを付け加えた形。これはいままでないと思えます。こんなに日本人が長生きするようになったのは初めてですから。新しく創造する使命があると思えます。

家族という関係を考える キーワード

そういったことを考えていくときに、是非考えて欲しいことを4つ程指摘しておきました。

一つは幸せという言葉です。感

情、一昨年になりますか、神戸で研究会があって、家族関係論の先生がこういっていました。「今まで日本の家族というのは女性の自立、権利に余りにも譲歩し過ぎたんじゃないか」、ということです。女性が自分の幸せだと思って、自分の権利を追及していった結果、自分が所属していた家族が最終的に不孝になっているケースが多い。そういった意味で、家族を前提にした幸せとはなにか。そこから男女の関係をもう一度考え直す必要があるのではないかと、という発言がありました。私は正直言って、感動したというか、その勇氣に敬服いたしました。というのは、聞いているのは、家族の研究者ですから、家族の研究者というのは女性が多いですね。独身の先生も多いですけど、結婚してもバリバリで、身近なところで言えば、例えばこんな先生もいます。何で私が自分の旦那にリング剥いてやらなきゃいけないのよ。食べたかったら自分で剥けばいいのよ。しっかり家事の当番表を作って、今日は私、明日はあなたってね。そういうことをやっている先生もいます。そういう先生達を前に、言い切った先生の勇氣。多分その先生は大阪で、命の電話の指導もなさっている先生でしたから、電話相談とか、直接家族の問題に触れて、そう言わざる

をえなかった。どうもこれまで日本が目指してきた家族のシステムというのははっきり言って間違ってるのではないかと。その根拠はだってみんな幸せではない。幸せという言葉、これが、これから家族を考えていく意味でぜひ必要になっていく言葉ではないかと。幸せというのは簡単に言うと自分の好きなことをすること、とっているかも知れない。自分の欲しいものを手に入れば幸せになれる。しかし、もうそれじゃない、という時代ですよ。私の幸せー私のーと出したときに、多分今までのシステムというのは誰かの犠牲の上に成り立っていたものだと思うんですね。昔は多分男性がいい思いをしたろうと思います。家族の中で、好きなことをやって。そのときには女性に犠牲になってもらったと思う。その反動だと思って私も我慢してるところもあるんですけど。みんなが幸せになるにはどうしたらいいんでしょう。今の日本の、繁栄というのは弱い国から搾取して幸せになっているわけですよ。誰かが犠牲にならない、幸せになり方。私が幸せを追及していくときに、誰かを不孝にしていなにかを考えながら、家族という枠組の中での幸せを考えていかなければいけないと思います。

そういう意味では一聖書のなか

に貧しい人は幸いである—物質的なものではない。というのがまず一つ。経済的な発展を否定できる。本当の幸せは物質的なものでは得られない、ということ再度確認していると思うんですね。物を買っても、満足できない。寂しい時、空しい時に私はフラフラと本屋にいった本を買ってしまうんですけど、物に頼ってしまってる。満たされているときは物に欲しくないと思うんです。人間関係で気持ちが満たされているときは物はなくていいんですね。家族の幸せというのは、一緒にいること。これが家族の幸せ。私のプロポーズの言葉というのは「ずっと一緒にいよう」。私は何にも出来ない、金もないけども受けてくれたから結婚したけども、裏切っているから後目たさもあるんですけども。「一緒にいるだけで幸せ」、本当に一緒にいるかどうかですよ。その辺を考えると家族がみえてくるんじゃないかと思うんです。

もう一つは憎しみ、怒でもいいです。家族愛、家族は仲良くというのは逆なんです。家族は愛情で結ばれているというイデオロギーは何の根拠もありません。親子だから愛しあわなければいけない、愛しあえなくて当然ですよ。夫婦だから愛しあってアツアツというのは、最初だけかも知れない。夫婦でも相手に対して

憎しみを感じることもあると思います。一番いけないのは、ごまかしている。現代の風潮のいけないところなんです。例えば、学校で、みんな仲良くしましょうというのを先生はなんの疑いもなく教育してきたと思うんですね。一人一人が個性的な存在だということを前提としたときに、みんなと仲良くすることは絶対に不可能だと思います。嫌いな人がいるから好きな人も出来るわけです。学校で教えなければいけないのは嫌いな人とでもそこそこ付き合っていくことだと思います。みんなと仲良くするというのではなくて。それが、相手と喧嘩するといけません。憎むというのがいけない風潮がどっかにあるんじゃないかと思うんですね。だから、表面的にとり繕っていて、一緒にいるんだけどもその中で本当に深い孤独を感じる。学生が、「卒業論文で孤独の研究をしたい」と言ってきて、「一体どうしたんだ。」「私は家族の中で非常に孤独を感じる。」というのが彼女の出発点だったんですけども。憎しみだとか怒だとかの否定的な感情を押し殺した関係というのは本当の愛に届かない。学校のいじめで悲惨なのは、人間好きな人もいる、嫌いな人もいる。嫌いな人とでも仲良くしなさいといわれたら、複雑に絡み合って、いじめてしまういじめられてしまう。これは自然のことで、ある程

度距離をおかなければいけないと思うんですけども。そういう意味で、身近であるがゆえに深く愛せるんだけど、深く憎んでしまう。私も父親に対してそうなんですけども、それを乗り越えたときに初めて人を愛するってことがわかるんじゃないかと思うんですね。人を憎めない人はもしかして人を愛せないのだとすれば、家族の中での憎しみという感情、怒という感情。これを出す、出せる、出してしまおうというのが大事だと思います。簡単にいえば心からの夫婦喧嘩というやつですけども、それをごまかさない、これが2つめのポイントです。

3つめこれは外にでますが、家族を考えるときに、今、大きく2つに別れるのではないかと思います。問題のない普通の家族、普通の結婚、普通の子供が産まれて、普通の人同士結婚、逆に何処かで躓いてしまう、問題がある、結婚しても問題を抱えてしまう。子供も問題をもって育ててしまう。問題のある家族。これがドンドン普通と問題ということを経済的に豊かな家族と貧しい家族と考えてもいいと思うんですけども。経済的な面も含めて、家族が2つに別れている。はっきりと階層化が進んでいる。

共稼ぎか一人で働いているかではっきり階層化が進んでいるのが

わかる。放送大学の公開講座で来た先生も指摘してたんですが、いざというときに、家族に何かあったときにその差がはっきりと浮き彫りにされる。普段は目立たなくてもなんか問題が起きたときに余裕のある家族は耐えられるんですね。そうでない家族は早い時期に問題が表面化してしまう。そのように家族は2つに分けられるというのを前提に考えていかないと、家族という言葉が共通理解されないんじゃないかなと思うんですね。

そして4つめ、皆さん一人一人の心の中に目をむけて欲しいんですが、さっきの憎しみと関係するかもしれませんが、ジレンマ、矛盾という言葉、これ人間らしさということから大切にしたいと思うんですね。今の家族のスタンスの取り方というのは、家族のしがらみから自由になりたい、という気持ちと一人になったら寂しい、という自由と安定、分離性と一体性。この相矛盾する2つの面が一人の人間の心の中にある。これを抱えておけない。矛盾というのは心理的に居心地が悪いものですから、どちらかに割り切ってしまう。ドロドロした部分を共に分かち合う関係が一子供達が長電話している、というのをあるお母さんから聞いたんですけども。電話は都合のいいときだけ相手してもら

える。こちらから何時でも切れる。そういう関係だから一出来でない。ドロドロした部分を出してしまっただろうかなと思っています。

この4つを思い付くままに書かせてもらいました。こう考えてみると家族というのは違った面からみえてくるのではないかと思います。

私の考えるこれから の家族の在り方

4ページめに私の考えるこれからの家族のあり方、ということで、最初に皆さんにもお聞きしましたが、今我々ははっきりと分岐点に立っていると思います。選択肢が2つあって、一つは、今までのような家族は今後成立しなくなるということを前提とした社会システム。つまり一人でも生きていけるような、社会システムを目指すのか。老後を家族では過ごせないということを前提としています。（選択1）やはり家族の中で生涯を過ごすことを前提とした社会システム。（選択2）この2つのどちらを目指すのかということ一度突き詰めて考えてみたらどうでしょうか。突き詰めて考えないというのは、戦後民主主義の悪いくせではないかと思うんですね。例えば、バブルだとか住専だとかエイズだとか常識的に考えておかしいこと。その時のことしか

考えていない。突き詰めて考えたらどうなるか常識で考えたらわかってるはずなのに、突き詰めていないというのがわかりますね。

5年後10年後に何故あのかとき突き詰めて考えておかなかったのかと言われぬように、私はこの2つ、どちらを基本にするのかと。勿論、実際の家族というのは、その間で揺れ動いていると思うんですけども。我々の社会の標準的なスタイルというのは何か。それぞれの皆さんが持って、それを前提とした社会システムを考えていかなければいけないじゃないかなと思います。私は個人的に選択2を指示しています。その根拠として、人間は一人では生きて行くことは出来ない。孤独は人間を非常に弱くします。ということは人間らしくない。最期まで誰かが側にいる生き方が大事であり、一血の繋がりということに限定しなくても一誰かが側にいるそのシステムとしての家族が必要ではないかという希望的観測とそうあるべきだという信念。それだけでは信憑性がないというか、敢えて何かを引用するとすれば、私はエーリッヒ・フロムという人が好きで、彼は10代で身近な人の自殺と第2次世界対戦を経験し社会と個人の間を考えた人なんですけども、こう言い切っています。

「我々は自分達の生活している社

会の要請に基づいて生きなければならぬ存在である。」これは個人を超える社会。「自分はどう生きるべきかは社会の要請に基づいて生きるべきなんだ。」と言い切っています。そしてフロムは続けて「精神的な健康不健康も社会の要請に基づいて生きているときは精神的にも健康だしそこに無理があれば精神的に不健康になる。」ということも言っている。

私は自分の人生をこれをベースに生きていきたいなど。これはもしかすると個人主義、戦後民主主義から真っ向から対立する考えかたかもしれませんが、これをもう少し考えてみてもいいんじゃないかと思います。

選択2、家族の中で生涯を過ごす為には何が必要か。まず一つは地域という概念。家族を包んでいたものとしての地域。最近流行りでいえば地域で支えていこうとする捉え方。私はそれでいいと思います。家族は外からの壁は厚いんですけども、地域全体が大きな地域主義みたいな感じで壁を造って、その中にいる家族を安心させることで、地域の中でお互いに入りが自由になる。自分の地域の枠を強くすることによって、個々の家族の壁を薄くする。家族と地域関係。これが一つ必要になってくると思います。

もう一つは家族内における関係、

親子間、夫婦間の日常的な葛藤の解決。上辺だけじゃなく、憎しみも怒もすべてさらけ出しての関係ですね。出す、受け止める。こういうトレーニングが必要だと思います。

3つめとして、自己の限定化と本当の「幸せ」体験。無限に自己を拡大させては駄目だと思うんです。我々は一度しか自分の人生を生きたりできない。そのときに誰と生きるか。そのところにその人の個性が現われると言ってもいいんじゃないか。例えば、今鷹巣に住んでいる。大館もいいんじゃないかな、と考えずに今自分がおかれていることを受け入れて身近なところにある本当の「幸せ」体験を確認する。なにが幸せなのか。それだけでは十分でないと思うので、その他ということで保留にして。

5番目として、選択2を定着させるためにも選択1への十分な対応一人で暮らしている人への関わりにも十分配慮する。必要じゃないかなと思います。

最後に様々な問題を解決するためにということで、皆さんはこれから色々な関係をもつわけですね。期待をしないで希望をもつ。期待と希望の違いわかりますか。この違いは大きいんですね。時間の軸を考えると、期待も希望も未来に対してですよ。期待というのは、かなり具体性がありますよね。今からその時までの時間

が閉ざされてしまう。期待した瞬間何が生じるかという裏切られる不安が生じるんですね。希望をもっているときというのはわからない、何時くるかわからない。希望を持つことによって全ての出来事が未来からの贈り物になるんですね。ところが期待したら、それが起きて当然。この違いを人間関係の中で、傷つけられている人が多いですね。期待しないで希望を持つ。駄目で元々。希望を持つということは、キリスト教でいえば、信仰、希望、愛という3つの大事な柱があるんですけども。相手を信頼しないとダメですね。相手に希望を持てるかどうか、私は相手に希望を持っているだろうかということは、相手を信頼しているかどうかということになります。一つの試金石であり、私は、カトリックの洗礼を受けていますけども、信仰という言葉を使わせていただければ、信仰するということにも深く関わってくる。希望を持たない人は、信仰できないということですよ。信仰を持っていれば希望をもって相手と関われる。これが問題を解決する一つではないかと思えます。

もう一つは、誰かの言葉ではなく、自分の心の中から出てきた自分の言葉で相手に話をする。これから家族を見直していこう、家族を重視していこうということになると必ず

出てくるのは昔の家族。それじゃ駄目です。なぜ昔の家族は駄目かというと、昔の家族というのは社会的な枠組で外から与えられたものだったんですね。そうではなくて、一人の人間が考えて「俺はこう思うんだけどもー」という言葉。この迫力。これをお互いに受け止めあう関係に気づかなければ駄目だと思います。私が父親との関係で嫌だったのが「世間を知らない」とか「お前は社会に出てないからわかんない」とか自分の意見プラス後ろに社会とか世間とかを被ってですね、押しつけられたことがあったんですね。それと、なんの根拠の無いことに親父がこだわってしまう。人間というのはそれぞれ自分の考えをもっていると思うんです。それをぶつけあいます。その迫力。皆さん、自信をもってもいいんじゃないかと思えます。特に、年配の人をお願いしたいのは若いものに対して思うことは沢山あると思いますが「昔はこうだったよ」ではなく「私はこう思うよ」でいいと思います。そういうレベルで伝えあう。若い世代に遠慮無く言って欲しい。50代60代の方は若い世代と話せないと思って口を閉ざしているんじゃないかと思うんですが、年配の方の言葉の重みというのは全然違います。今産まれた子供も、100年前産まれた子供も変わらないはずですよ。体質的な違いはあるかも知れませんが、今

どきの子供を造るのは今どきの社会、大人なんですね。今、例えば70の人が生きて来た人生と、今10歳位の子供と何も伝わるものがないとしたら社会じゃないですよ。共通の部分がないですから。バラバラですよ。何かあるはずですよ、何か伝えていかなければいけません。その場として、家族的なもの。伝えあえる範囲、つまり地域。地域のしきたりだとか行事だとかを含めてやったほうがいいんじゃないか、問題の解決に繋がると思います。

3つめとしてさっきも言いましたけど、相手のために時間を使う。お金や物ではありません。時間を相手と過ごす。これが大事だと思います。

問題の解決というのは、精神的な病について、どんな精神的な病も必ず治る方法があると言われていません。それは、誰かが人生をかけてその人のために生きること。今大事なことは一緒に過ごす。相手のために時間を使ってあげるということ。後は社会とか地域を考えたときに、もっとも弱い立場の人の視点でみる。ということで考えておけばまず間違いがない。自分の心に目をむけて、特に感情をごまかさない。怒とか悲しみだとかをごまかさずに生きることによって、自から生き関わりのなかで心掛けることによって家族がみえてくる。

最後に考察課題を書きました。是非皆さんに考えていただきたいのは、私にとっての家族とは誰か。これは具体的に一度名前をあげてみてください。漠然とではなく、その中に誰が入って、誰が入らないのか。私はどんな最後を迎えたいと思っているのか。そこから逆算するといろんなことがみえてくると思うんですね。現代人が忘れたことの一つに、我々は必ず死ぬんですね。これも変えられない事実です。だからこそ自分の遺産を次に伝えていかなきゃいけない。子供をつくらなきゃいけない、と思うんですね。どんな最後を迎えたいか。私は選択1と選択2のどちらを選ぶのか。私は誰と一緒に生きていくのか。誰が私と一緒に生きてくれるのか。私は誰のために生きていくのか。誰が私のために生きてくれたのか。ということを考えてみたら、考えることが家族ということを具体的に一人一人の問題として突き詰めていくときの方法になるんじゃないかと思います。

ありがとうございました。

曹洞宗の教えと現代

亀谷健樹

合川町 太平寺住職

三尊佛について

曹洞宗の本尊は、お釈迦様である。そして唱名は『南無釈迦牟尼仏』であることが、存外知られていない。

まして、三尊佛として奉祀されている、中心に釈尊。向って右に、わが国へ正法を伝えられた高祖様、道元禅師。左にその教えを日本全国に拡げる基をつくった太祖様、瑩山禅師についてなど、もっとも宗意安心の根本となる事柄が衆知されてないのは、まことに嘆かわしいことである。

よく「正伝の佛法」といわれる。つまりお釈迦様の教えが、祖師様がたを嫡々相承てきてきそうしやうされて今日にいたり、私達が現在まことにありがたく受け保ち、ふみおこなっている、知と行 についてなど、さらに深い所で自覚しなければならぬだろうと痛感する。

坐禅を行ずる

では釈尊は、何によって真実に生きる道を悟られたか。それは坐禅である。だから曹洞宗の安心の根源は坐禅だ。ただその坐禅は、悟るための方法ではなく、証まことった上の坐禅である。修証不二しゆしやうふにともいう。

坐禅することは、宇宙の中の大きなはたらきの中にどっぷりつかり、素直によるこび、自らを調ととえてゆくのである。

これは難しいことではない。常に無心に坐禅を行じたらよい。私など朝の梵鐘を撞くことにより、足がどうしたものか室中の暁天打坐に向いてしまう。これは自分の意志などではない。本来の自己のなせるわざと

いうべきか。調身、調息、調心も、自然にお任せするのみだ。天地の生命の流れに、身心をゆだねるといってよいだろう。

ともあれ、この静寂にひたるといことが、現代人にはほとんど失われてしまった感がある。あくなき効率化、スピードの競争、映像のはんらんなど、情報化、合理化の旋風は、私達の思考と感覚を麻痺させ、本来の生命力を根こそぎ枯らしてしまう方向に進んでいるのではないだろうか。

この私達の魂の底にある生命力を、是非とも生きいきとよみがえらせるためにも、常に坐禅、あるいは静坐をこころがけたいものである。

報恩の行持

坐禅は単に、禅堂で坐るだけではない。日常生活の中に坐禅のこころを活かすのが宗旨でもある。日々の生活態度が、そのまま佛道をあゆむ姿となる。つまりとらわれがない、差別をしない。すべてに慈悲の温かさをにじませ、悠々と利他行に励む。そうしてこそ真の宗教的生活が営まれるのである。

言い換えるならば、「本来の私にめざめた生き方」から、少しでも「さまざまなご恩に報いたいおこない」に転じてゆくのだ。

現代人は、食うために働くというのが一般的である。そのくせ飽食、残食の時代がいまだに続いている。しかし禅門では、食事は空腹を満たすため、生きるためでなく、佛の道を成しとげるため、頂戴するのである。

また本宗には、作務という日常の労働がある。これは単なる仕事でなく、大事な佛道修行とみる。たとえば寺院内外の清掃なども、汚れているから掃除するのではなく、佛様の身体を少しでもより清浄にしたいと勤めるのである。

さらに、ふだんの生活の中でも、道傍にゴミが落ちていると拾わずにおれない。履物が乱れていると、揃えずにおれない。人が見ていようと見ていまいと、そうせずにはおれないのが報恩の行持である。これを波紋の広がるようにはたらきかけてゆく。

今、この瞬間は、二度と繰り返さぬことの出来ない貴重な只今である。これを最高に生きる。

只今、生きている喜びが、そのまま小さな法悦の種子を植えるおこないである。それが芽生え、葉や茎をのばし、さらに世の中いっぱい、美しい心の花を限りなく咲かせるための根源の、どろ沼に皆とともに飛び込んで、肥沃^{ひよく}の精進を惜しまないのが、曹洞宗の教えのめざすところであろうと、私は思っている。

以上、膨大な教義の中から、現代を生き抜くための肝要な視座を、三つだけ紹介した。

BOOK REVIEW

まり難しいことは書かずに「ウン」とうならされたところを抜き出してみたいと思います。

まずは「あとがき」から。
先代の桂三木助師匠は、病床で「今から死ぬ」と何度も仲間を招び集めていた。その日に死ねないと「恥ずかしい」といいながら解散。それを繰り返しているあいだに亡くなった。死ぬとって死ねなかった時に、「はずかしい」という気持ちがよくわかる。『二度目の大往生』も同じように恥ずかしい。

生臭さ坊主だなんて、悪口のつもりでいう人がいるけれども、これは褒めことばなんだな。生臭くない坊主が生臭い人間を救えるか、相談相手になれるか。

ひたむきに生きている国では、死ぬなんて問題にも話題にもなりません。

死について、なんののかんのと
言っている国は天下泰平なんですよ。

二度目の大往生

永 六輔著

岩波新書1996/10/20

620円

ベストセラー「大往生」の続編です。永さんのバラエティーショウを活字にしたような本です。あ

一般公開講座実行委員会から - 状況報告その2

現在も10月20日の公開講座に向け着々と準備を進めています。コーディネーターには龍谷大学教授の奈倉道隆氏をお願いすることとなりました。氏は医師であり、龍谷大学では社会福祉学の教授であり、さらには出家して浄土宗の僧籍をもつ僧侶でもあります。この度の講演会のディスカッションのコーディネーターとしてはこれ以上ないという方に来ていただけることになりました。氏のアドバイスもあり当日は金子真介師と森津純子氏の基調講演、休憩をはさんで奈倉先生とビハーラ等からの2名を交えたディスカッション、会場との質疑応答というおおまかな流れが決まりました。とくに会場との質疑応答に時間をとることになりました。

準備の進捗状況としては、6月中に印刷物を完成させることをめざして講演や協賛の依頼、ポスター、パンフのレイアウト、印刷会社の選定、交渉等を行なっております。当日は会場整理、受け付け、質疑応答の際のマイク係、駐車場係等相当の人手が必要になります。皆様の御協力が是非とも必要になります。何卒御協力お願いいたします。

心の詩

借りたら返す

生きているということは
誰かに借りをつくること
生きてゆくということ
はその借りを

返してゆくこと

誰かに借りたら

誰かに返そう

誰かに返そう

もらったように

誰かにそうしてあげよう

永
六輔

今、家族を考える

日時 5月25日(土) 午後7時～

場所 鷹巣阿仁広域交流センター

講師 五城目町 椎名テル子氏(町訪問看護ステーション所属)
 藤里町 夏井アヤ子氏(特養ふじさと所属)
 鷹巣町 畠山絹子氏(ひまわりグループ所属)

他に二ツ井町と大館市から参加予定です

先回は佐々木久長先生から、家族とは何なのか、どう変化しているのか、そしてこれからどうなっていくのか、ということを知ることができました。いわば家族問題の基礎講座でした。

では、実際に起きている家族の問題とはどういうものなのでしょう。日常生活では見えてこないもの、病む人や老いた人を抱えたとき、そこには様々な問題が起こってきているのではないのでしょうか。

今回は現場で活躍されている方々にお集まりいただき、今家族を巡る問題にはどのようなことがあるのかを発表していただき、それらについて語り合うことから、病む人、老いる人、それを支える家族、医療者、福祉のより良い関係が見つければいいなと考えています。是非、参加してご意見を聞かせてください。

ふだん何気なく一緒に暮らしている家族、しかし、そこに潜んでいる問題は生きることから死ぬことまでの様々な要素が複雑に絡み合っていて生じてくるということを知り、佐々木先生のお話から学ばせていただきました。人前で自分の家族について語るのには、大変勇気のいるものだと思います。それを赤裸々に包み隠さずお話しいただいたことに深く感謝申し上げます。次回セミナーでは、実際現場で活躍されている方々の生の声を通して、「家族」について考えます。乞う、ご期待！

ビハーラリポート	
第18号 1996年5月16日発行	
ビハーラリポート発行所	
ビハーラ代表 兼能代山本地区事務局	
藤里町月宗寺内	袴田俊英 0185-79-2468
大館地区事務局	越姓玄悦 0186-49-6957
比内地区事務局	小林匡俊 0186-55-1144
森吉地区事務局	奥山亮修 0186-72-4143
阿仁地区事務局	今井典夫 0186-82-2418
鷹巣地区事務局	佐藤俊晃 0186-66-2032